十和田の夏霧

泉鏡花作

彼處に、遙に、湖の只中なる一點のモーターは、日の光に、たゞ青瑪瑙の瓜の泛べる風情がある。また、行く船の、さながら白銀の猪の騒けるが如く見えたるも道理よ。水底には蒼龍のぬし　を潜めて、大なる蟒〓の影の、藻に亂るゝ、と聞くものを。現に其處を漕いだ我が友の語れるは、水深，實に一千二百尺といふとともに、青黒き水は漆と成つて、梶は、辷り櫓は膠し、ねば／＼と捲かるゝ心地して、船は其のまゝに人の生えた巖に化しさうで、もの凄かつた、とさへ言ふのである。私は休屋の宿の縁に

ー　床は高く、座敷は廣し、襖は新しい　ー

肘枕して視めて居た。草がくれの艫に、月見草の咲いた、苫掛船が、つい手の届くばかりの處、白砂に上つて居て、やがて蟋蟀の閨と思はるゝのが、數百一群の赤蜻蛉の、羅の羽をすいと伸し、すつと舞ふにつれて、サ、サ、サと音が聞こえて、うつゝに蘆間の漣へ動いて行くやうである。苫を且つ覆うて、薄の穂も靡きつゝ、旅店の午は靜に、蟬も鳴かない。

颯と風が吹いて來る、と、いまの天氣を消したやうに、忽ちかげつて、冷たい小雨が麻絲を亂して、其の苫に、斜にすら／＼と降りかゝる。すぐ又、沖から捲れかゝる。時に、薄霧が、紙帳を伸べて、蜻蛉の色はちら／＼と、錦葉の唄を描いた。八月六日の日と覺えて居る。むら雨を吹通した風に、大火鉢の貝殼灰　ー　これは大降のあとの昨夜の泊りに、何となく寂しかつた　ー　それが日ざかりにも寒かつた。

【完】